

## 講演②

# 都からみた古代山城と城柵

### 講演者紹介

國下 多美樹（くにした たみき）

龍谷大学大学院文学研究科修了。（公財）向日市埋蔵文化財センター勤務を経て、現在、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻教授。文学博士。専門は、日本考古学。

# 「都からみた古代山城と城柵」

龍谷大学文学部教授 國下 多美樹

## はじめに

皆さんこんにちは、龍谷大学の國下と申します。よろしくお願ひいたします。今日は、「都からみた古代山城と城柵」というテーマにさせていただきました。私が普段やっていますのは、古代の日本の都を考えるということでございますので、私の調査研究の土台の都から今日のテーマを考えていこうというようなことにさせていただいた次第でございます。

今日の話の構成は、まず、一番に日本の都、城、柵と題しまして先ほど先生の方からお話をあつたのですが、辞書的な意味でどのような定義ができるのかというお話をしまして、二つ目に都の宮垣と羅城の性格というお話をいたします。都っていうのは、いったいどのような壁で囲んでいたのかということを具体的に考えていくわけです。その中からお城を囲むということと、都を囲むっていうのは少し比較する材料を得たいなというのが、実は狙いでもあります。そして三つ目は都からみた城柵と山城です。今日は、お手元にお配りしている私の資料の中に、年表のようなものをつけてございます。表1(①)～(④)は平成二七年九月の鞠智城シンポジウムの岡田茂弘先生の講演の中から「古代日本東

西の城・柵略年表」という、まさに今日のテーマにあつた内容の表がございました。それをちょっと借用させていただいて、その中に日本の都の変遷を入れさせていただきました。少し小さい字で恐縮なのですが、これもたまに見ていただきながらお話を聞いていただけたらというふうに思います。

さて、初めなんですが、お手元の資料の内容とほぼ文面同じものが流れていきながら、また関連する図や写真が画面に出てまいりますので、お手元の資料にメモをとりながらでも結構ですのでお聞きいただけたら幸いです。

まず、古代律令国家が成立しまして展開し終焉を迎えるまでおよそ二五〇年間あります。都はその位置と形、構造が、その間変化してきたわけです。それは七世紀、王権の拠点を飛鳥の地に固定化した七世紀の終わりから八世紀にかけて、律令国家の政治体制を整えてきたわけです。そして八世紀の末、九世紀、長岡京の都、そして京都の平安京というふうに都の変遷があり、律令国家の体制の整備をしてきたのだけれど、結果的には一〇世紀には律令国家の体制は崩壊に向っていくというふうに、今、一般的に理解されているわけです。その中で都というのは「宮」と「京」という二つの空間を持つていいわけです。で、そういった空間を持つて、しかも列島の中の中央部に一つの都というものを造ってきたですから、これは東アジアの中でも、一つ特質できるよ



8月倭軍、百濟白村江で唐新羅連合軍に敗戦（書紀）					
663	天智 2	この歲剝馬・壹岐等に坊人・條を置き、筑紫に水城を築く（書紀）			
664	天智 3	天智(662-671) 8月百濟官人を派遣、長門国と筑紫國の大野・基様城を築かせる（書紀）			
665	天智 4	11月倭國高安城、諱改封置島城、対馬國金田城を築く（書紀）			
667	天智 6	2月長門に一城、筑紫に二城を築く（書紀）			
669	天智 8				
670	天智 9				
672	天武元	太宰府政行断第1期(7世紀後半～8世紀初頭) 天武(672-686)	6月壬申の乱（書紀） 7月天武軍が三尾城攻略（書紀） 飛鳥淨御原宮に遷る（書紀） 多林鳴の人々を飛鳥寺の西の楓の下で埋葬する（書紀） 難波に羅城を築く（書紀） 隼人を飛鳥寺の西の楓の下で斬立てる（書紀） 飛鳥淨御原令を施行する（書紀）	正月勝東國倭者壘郡の城養蝦夷に赴く（書紀） 門を許す（書紀）	正月勝東國倭者壘郡の城養蝦夷に赴く（書紀） 門を許す（書紀）
677	天武 6	677 天武 8	12月藤原宮遷都（書紀）	この頃仙台郡山遺跡第II期官廄造營	
679	天武 8	682 天武 11	8月高安城修造（統紀）		
689	持統 3	689 持統 3 持統(687-696)	9月高安城修造（統紀）		
694	持統 8	698 文武 2	12月大宰府に三野・稻積の二城を修させる（統紀）	2月越後・佐渡國に再び石船柵を修造させる（統紀）	2月越後・佐渡國に再び石船柵を修造させる（統紀）
699	文武 3	文武(697-707)	3月大宝律令施行（統紀） 8月高安城を廢止（統紀）	3月大宝律令施行（統紀） 8月高安城を廢止（統紀）	3月大宝律令施行（統紀） 8月高安城を廢止（統紀）
700	文武 4		3月平城京遷都（統紀）	7月出羽柵初見（統紀）	7月出羽柵初見（統紀）
701	大宝元				
709	和銅 2	元明(708-714)			
710	和銅 3	12月備後国茨城・常城廢止（統紀）			
719	養老 3	元正(716-723)	2月隼人反し大隅国守殺害（統紀）	3月大伴旅人を征隼人持節大將軍に任命（統紀）	9月隼人反し大隅国守殺害（統紀）
720	養老 4				

表 1-② 古代日本の都・城・柵年表  
 (岡田茂弘 2016 「古代日本東西の城・柵略年表」もとに加筆)

西暦	和暦	天皇	西南日本（出典）	主要官断 駄智城	都城・畿内（出典）	東北日本（出典）	主要官断
583	敏達12		この猿火葦北国造の子、百济達率 日羅が倭国に召れ、国内要衝に墨 筆を集く等献言（書紀）		小豐田宮に遷る（書紀）		
603	推古11	推古	(592- 628)		飛鳥岡本宮に遷る（書紀）		
630	舒明2	舒明	8	(629- 641)	岡本宮焼亡、田中宮に移る（書紀）		
636	舒明8	舒明	12		百濟宮に遷る（書紀）		
640	舒明12				乙巳の変（書紀）		
645	皇極4	皇極		(642- 644)			
645	大化元				難波長柄豊崎宮に遷る（書紀）		
646	大化2				改新の詔（書紀）		
646	大化3	孝德		(645- 654)			
647	大化3				この猿越国に浮足櫓を造り、櫛戸を 置く		
648	大化4				この猿越国に盤舟櫓を治め蝦夷に備 え、越・信濃の民を櫛戸に配置（書 紀）		
655	齊明天元				飛鳥板蓋宮焼亡、飛鳥川原宮に移る (書紀)		
656	齊明天2	齊明天		(655- 661)	後飛鳥岡本宮に垣を巡らせる（書紀） 田身嶺に垣を造る（書紀） 香山の西より石上山に至る溝を掘 り、舟で石を運んで垣を作る（書 紀）		
658	齊明天4				この猿百濟国王・妃・太子が新羅 の虜になる。國家が西北の畔りに 兵を陣し城柵を修修（書紀）		
660	齊明天6				3月安倍比羅夫が鶴田（あぎた）・ 津代を征討（書紀） この猿都候沙羅櫓造らに授位（書 紀） <仙台郡山1期官衙造営>		
					石上池のほとりに須弥山を作り、萬 横を彌むする（書紀）		

表 1-① 古代日本の都・城・柵年表  
(岡田茂弘 2016「古代日本東西の城・柵略年表」もとに加筆)

789	延暦 8		6月征東特軍拒天城での敗戦を報告する (鏡記) 9月征東将軍、箭刀を追上し敗戦の懲罰を受ける (鏡記)	3月諸国軍・多賀城に介し賊地に入れる	
791	延暦10	桓武(781-805)	7月大伴弟麿呂を副使に任命 上田村麻呂(後記)		
794	延暦13		1月征夷大將軍(大使) 大伴弟麿に箭刀を賜る (後記) 6月征夷副將軍(副使) 坂上田村麻呂以下、蠻夷征伐 (後記) 10月平安京に遷都 (後記)	正月坂上田村麻呂に陸奥國胆沢城造営を命ず (紀略) 3月遣志波城使坂上田村麻呂辟見 (紀略)	多賀城政行Ⅲ期(789-~869)
802	延暦21			正月隨奧國中山柵羽羽見 (後記)	
803	延暦22-			12月隨奥國出羽接索使文室綿麻呂が志波城遷置を建議し、許される (後紀)	
804	延暦23			11月胆沢・徳舟の二城に構・塙を取納 (後紀)	
811	弘仁 2	嵯峨朝(809-823)			
815	弘仁 5	文德明(850-858)	閏2月肥後國菊池城院の兵庫の兵庫の錫が自鳴、6月再び自鳴、不動倉11字が消失 (文德)	5月陸奥國大地震、各地被災、海水多賀城下に至る (三実)	多賀城政行Ⅳ期(869-~9世紀中頃)
858	天安 2				
869	貞觀 11		5月大野城の器仗、大宰府庫に准じ交替検定 (三代格)	3月出羽國夷俘反し、秋田城を焼く (三実)	
870	貞觀 12	清和朝(859-876)	3月大野城衛卒40人の糧米を城庫に納めさせる (三代格)	是歲守藤原保則・秋田城を復立、旧制に倍する (保則云)	
876	貞觀 18				
878	元慶 2	陽成朝(877-883)	3月菊池城院兵庫の戸が自鳴 (三実)		
879	元慶 3	宇多朝(887-896)	閏5月新羅の械、肥後國飽田郡に襲来し民家を燒く (紀略)		
895	寛平 5				
897	寛平 9				
				9月秋田城の甲冑自鳴 (紀略)	

表 1-④ 古代日本の都・城・柵年表  
(岡田茂弘 2016「古代日本東西の城・柵年表」もとに加筆)

表 1-③ 古代日本の都・城・柵年表  
 (岡田茂弘 2016「古代日本東西の城・柵略年表」もとに加筆)

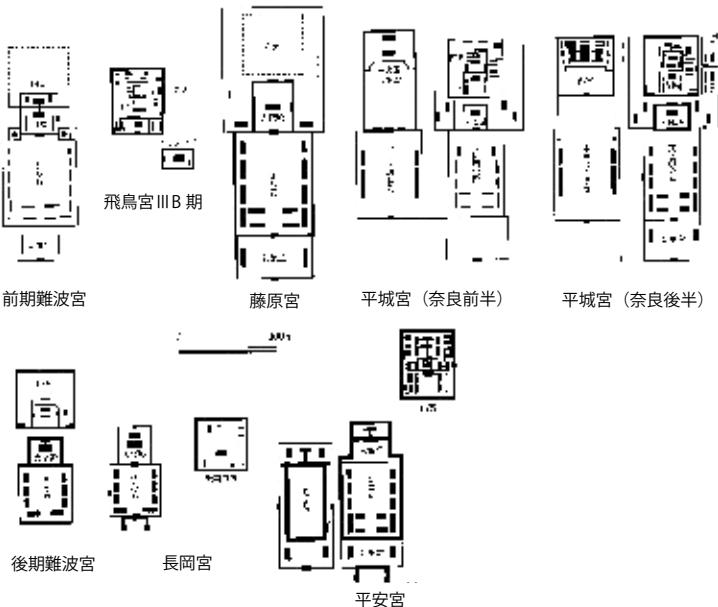


図1 日本の都における中枢施設（内裏・大極殿院・朝堂院）の変遷  
(李 2018 を改変・加筆)

うな世界観というものを創つてきているといふうに言えると思います。

さて、日本の都なのですが、これはもうこれまでの研究で明らかですが、大陸の影響を非常によく受けているというふうに言われます。飛鳥時代からその影響を受けてきたわけですから、いかに我々日本という国が大陸、世界というものを意識してきたのかっていうことがよくわかります。その変化っていうものは、まさに宮の形に現れているわけですね。今日の私の資料の中にも宮殿の図が、実は並べてございます。図1です。実は、宮殿ごとに形が違うということは一目でおわかりいただけます。この話は、ちょっとこの話は、討論のときに使わせていただこうかなと思うます。こういうふうな形で変化しているのだ

なあということでお分かりいただけると思います。基本的に規模が大きくなつて、整備され整つていくというような変化で説明できます。一方で、そういった律令国家の中央の変化とは別に、中央政権というのは各地方に対する政治を行つてきたわけです。それが今日のテーマであるところの東北の城柵であり、あるいは西日本、西南日本にある山城であるということなんだろうと思ひます。そういう意味では中央、列島の政治史というものをまさに反映しているし、外交史も反映しているというふうに見ていいんだろうと思ひます。

## 一 日本の都・城・柵

さて、古代の山城と城柵を都から見るとどのように見えるのかというのが私のテーマなのですね。私の報告は都における「宮垣」みやがきと「羅城」らじょうの性格をまず確認してまいります。その上で古代の山城や城柵と比較して律令国家がどのように地域支配、国家の支配というものを進めていったのかというところに結びつけていけたらというふうに思つています。まず一番、日本の都、城柵というテーマです。都とは、都城というふうな表現もあつたり、あるいは、宮都とも表現されるわけですが、いわゆる都とは天子の住居のある集落というのが原義、元々の意味であると、和訓での都は宮、つまり「宮」という字と、その場所を表す「処」がついたものであるというふうに、岸俊男先生が述べられたわけですが、これは非常に分かり易い。つまり、天子がおられるその居所とその辺りというのが都の原義で

あるということなのですね。先ほど熊谷先生が詳しい話をされたのでやりにくいのですが、これは教科書的なというか辞書的な説明なのですが、城・柵という言葉ですが、辞書で調べますと「城」というのは内側が城、外を郭というふうに呼び分けている。実は「キ」という、熊谷先生がおっしゃいましたが、都という意味もあるということなのですね。で、「城（じょう）」、「城（キ）」というのは防御のための砦というのもとの意味であると、そうすると城柵という言葉が出てきたのですが、砦と同じ意味で敵に備えるための土を重ねて造つたお城であるということです。一方、「柵」っていうのは丸太を並べたそいつた施設。矢來であるというふうに定義がされています。こんなふうに、まずは定義のところを少し見ていくわけですが、実際には、先ほど先生がおっしゃったように歴史といふ流れの中で、それぞれの持つていてる意味というのはたぶん変わっていくのだろうと思います。そのあたりは、文献史料を使いながら説明していくのが正しい方法だらうと思います。

しかし、今の原義なのですが実際には軍事的な性格つていうのが城柵にはあるわけですが、実際には政庁域というものが伴う。政庁域つていうのは先ほどお話してくださつたように儀式、儀礼を行う場でありますから、軍事的な性格ということでははつきり言つて無関係にも思えるわけですが、これが実状なのですね。それから山城というのも、今日のテーマである鞠智城のような、少し内陸に入つたところに造られて、しかも今日のテーマで議論されます官衙、お役所のような性格をもつてているということになりますと、単純に言葉だけの意味を持つてそれぞれの施設というものを見るわけには

いかないんじやないかということになります。つまり、一言でいうと都と山城、それから城柵っていうのは多様な要素を実は持っているというところが、いわば日本独自の構造というものを持っているというふうに説明できるだらうと思います。次のお話に移ります。

## 二 都の宮垣と羅城の性格

では、日本の古代の都の宮垣と羅城について文献史料と、少し遺跡の発掘調査の資料を見ながら、どのように今、考えられているのかということを見てまいります。『日本書紀』の天武五年（六七六年）には、「新城に都をつくらんとす」と書かれてございます。実は新しい城というふうに書かれているわけなのですが、この新城なのですが、天武一年（六八二年）にも出てまいります。たびたび登場するわけですね。そして持統五年（六九一年）、持統八年（六九四年）には「新益京」、新しく益した京と書いて「あらましのみやこ」と呼んでいますが表現されました。持統八年には、皆さんよくご存知の藤原京という表現が出てまいります。つまり、同じ場所に作られた都に対して、違った表現がされているということになります。これは議論がまだ続いているわけで決着を見てはいるわけではないのですが、一つの都に対する表現にお城という字を使っているということは、少し注意しておく必要があるだらうと思います。有力な意見だと思いますが、飛鳥にもともと宮殿がありましたから、飛鳥のすぐ北側にできた広大な都市、つまり新たに造った「城」である。新たに益した都であるとい

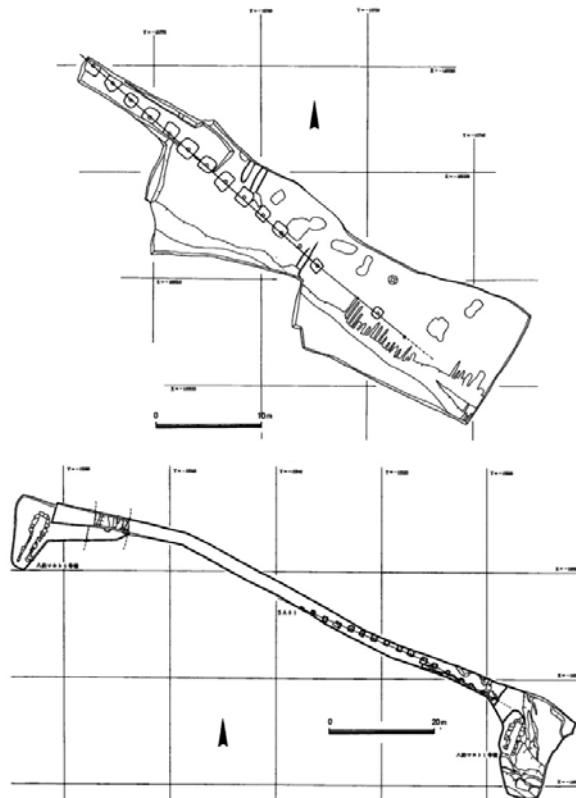


図 1 上 酒船石向イ山地区（明日香村 2000）  
下 八釣マキト遺跡（明日香村 2001）

うような意味だらうと解釈される。飛鳥を中心に調査されている相原嘉之さんの意見に私は同意しております。

つまり、そのような形で都の中でも、実は「キ」という表現が出てくるということなのであります。実は、「飛鳥」と「飛鳥の周辺」の発掘調査をしていくと、まるで防御施設かなど思われるものが見つかってきたわけです。例えば、図1です。何が明らかになつたのかといいますと、柱が並んでおります。図のように一本柱塀が出てくるということがありますね。しかも、丘

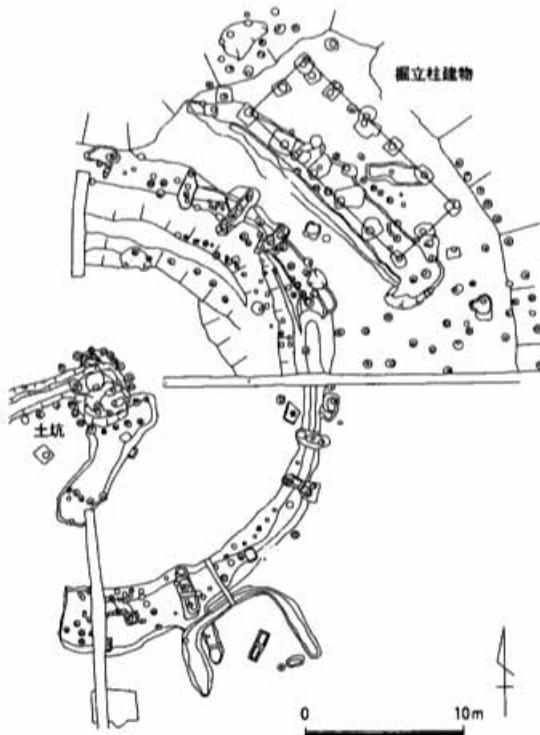


図2 森カシ谷遺跡（高取町 2003）

の上から出てくるということなのです。丘の上でこういった一本柱の屏が出てくるというのは異常ですよね。それをどう評価するかということなのです。それを評価していくのは飛鳥周辺だけじゃなくて、飛鳥から和歌山に繋がる道上ででも、高取町というところからもこのようない不思議な施設が見つかった。図2は森カシ谷遺跡です。ここで烽、つまり烽火<sup>とぶひ</sup>を上げた跡だろうと思えるような遺跡が見つかっているわけです。そうしますと、飛鳥を中心とした飛鳥時代の宮殿、あるいは都を防衛す



図4 前期難波宮  
(植木久『難波宮跡』2009  
掲載図を再トレス)

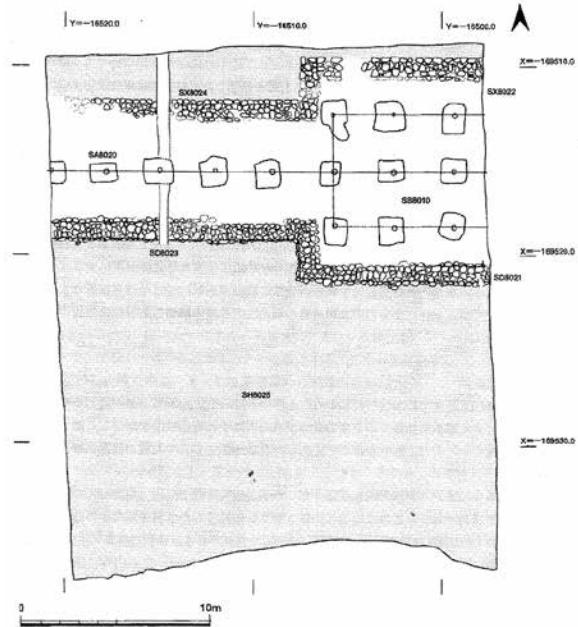


図3 飛鳥宮III期(齊明朝～天武朝)  
内郭南門と1本柱塙  
(飛鳥京跡III 2008より引用、加筆)

るための施設というものが、もしかすると周りにあるのではないか、あるいは交通の要所にこういった烽というものが造られたのではないかというような推測が当然成り立つといいわけなのですが、まだ実は事実関係といいますか、発掘としては、都を守る施設もある可能性があるのだということを知っておく必要があると思います。私は少しまだ慎重な意見です。

### 宮垣と一本柱塙

さて、宮垣と一本柱塙というところに入りますが、『日本書紀』の皇極四年の六月に「法興寺に入りて城と備う」とい

う記事が出てまいります。先ほどご紹介がありました。お寺というものが防御施設として使われたということなのです。つまり、寺院というのは、当初から築地ついじという土壙を導入してござります。ただ、お寺が土壙を導入していますが、宮殿の方はといえば土壙ではなくつて、壙なのですね。一本柱の壙なのです。掘立柱の柵が宮殿の実は建築様式として、それが取り入れられるのは平城京の都からとうふうに分かっています。図3の絵は飛鳥宮のⅢ期、齊明天皇の時代と天武天皇の時代の宮殿の内部にあつた内裏の南の正門です。一本柱の壙がとりついています。これこそが、宮殿の内部を区画する施設であると、そしてちょうど飛鳥に都があつたときⅠ期、孝徳天皇の時代に大阪の中央区の法円坂のところに難波宮と呼ばれる宮殿が造られたわけですね。そのときの宮殿は、発掘成果で図4のような絵が描けるところまでいきまして、これで何がわかつたのかというと、いろんなことがわかつたのですけれども、南側を掘立柱で、あの複廊にしていると、複廊というのは複数の複に廊下ですから、廊下が二つあるという施設になります。宮城の南側については莊嚴化しているということがいえるだろうと思います。飛鳥時代に一本柱壙というもののや、あるいはこういった複廊というような壙で構成されるという変化が起き始めるのですが、それが本格的な都市を備えた藤原京の中心部にいついたらどすね。平城宮では、平城宮の内裏・大極殿というところの回廊を発掘したら、図5のような木材を加工したものが出てきたわけですね。それは実は藤原宮から持つていったものであるということが、ほ

ば推定されているのですね。藤原宮の南側にあった朱雀門の東西の一部区間が単廊、廊下が一つだけのもの、あるいは二つだけの複廊形式であつたということなのですが、それがとりついていく。こういうふうな木の塀なのですね、木の柱で土壁を持つた塀であるということなのです。

つまり、これは宮殿を囲んでいる塀の形であるといふことが、平城宮の発掘で明らかになつたということなのです。お手元の資料にも書いてございますが、地面から五トメ<sup>1</sup>超えるぐらいの高さです。五トメ<sup>1</sup>超えますので、ちょっと乗り越えようなんてことは当然できません。ですので、単なる壁というよりは、やはり、外側と完全に隔絶して中に入れないので、そのような壁を作っているということだろうと思います。さて、文献史料をちょっと見ていくのですが、史料1と2です。まず『日本書紀』の大化四年、六四八年の三月に

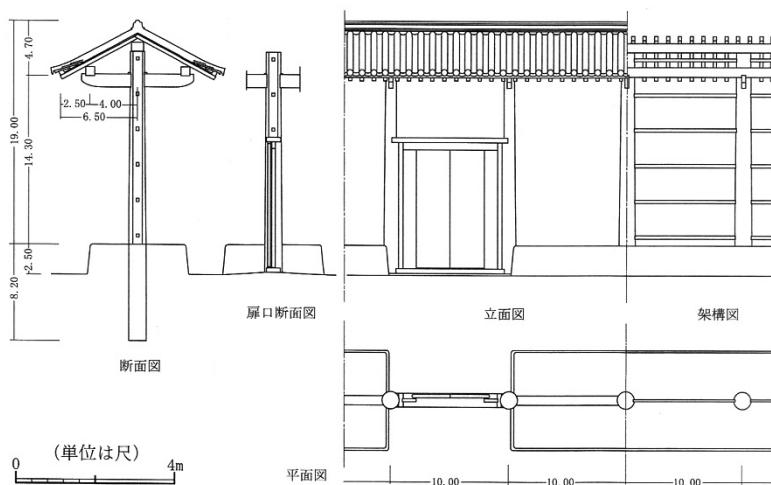


図5 平城宮出土木樁から復元された藤原宮の1本柱構造の宮垣  
(平城宮XI報告を再トレース)

は「朱雀門は出御の場であり天皇

の日常空間と非日常空間の境界の役割を担つた」ということを、この記録から読み取ります。

### (史料1)

三月乙巳朔辛酉、安倍大臣薨。天皇幸<sub>二</sub>朱雀門<sub>一</sub>、挙哀而慟。皇祖母尊・皇太子等及諸公卿、悉隨哀哭

『書紀』大化四年（六四八）三月条

### (史料2)

三年春正月壬子朔、(中略)。左將軍正五位上大伴宿禰旅人、副將軍從五位下穗積朝臣老、右將軍正五位下佐伯宿禰石湯、副將軍從五位下小野朝臣馬養等、於<sub>二</sub>皇城門外朱雀路東西<sub>一</sub>分頭、陳<sub>二</sub>列騎兵<sub>一</sub>、引<sub>二</sub>隼人・蝦夷等<sub>一</sub>而進。

『続紀』和銅三年（七一〇）正月朔条

意味がある。

もう一つの史料2は、和銅三年、都は平城京に移ろうとしていたそのときに、平城宮の朱雀門に

至つて隼人・蝦夷に対して国家を示威する場になつてゐる。つまり、この史料の上に並んでゐるのは左將軍からはじまつた大伴宿禰旅人以下、いわゆる軍人が軍家が名前を上げています。彼らがどこに立つたかというと皇城門。皇城門というのは、いわば朱雀門の外側の、ようは羅城に相当する門です。羅城の外側はどうなつてゐるかというと、「下ツ道」という道があるわけです。朱雀の道になります。宮殿の真南の大通りに左右に分かれて立つわけです。何のために立つたかというと、それは隼人・蝦夷らが進んで宮殿の中に、天皇にお札に、会いにくるのを、そこで迎えておるわけです。

### 築地の導入とその後

つまり、そのような場として朱雀門は意味がある。こんなふうに見ていくとどうも宮殿というものの正面側にある堀というのは、やはり意味がどうもありそうですよね。単なる入り口ではなくつて、そこは外から入つてこられる方に対して何か示威する場というふうに考えるのが自然だし、そのように考えられています。実は、平城宮で初めて築地が造られたことは、平城宮の発掘調査で裏付けられています。まず築地なのですが、土を版築して版築っていうのは厚さが五センチ程度、少しづつ土を入れながら突き棒で突いて叩き上げる方法です。それで屋根を葺きあげた。そういう構造のものです。私たちが現在、見ることができるのは法隆寺がありますね、法隆寺に行かれたら重要文化財になっている壁がまさに築地なのです（図6）。ああいつたものが平城宮から採用されていくというこ

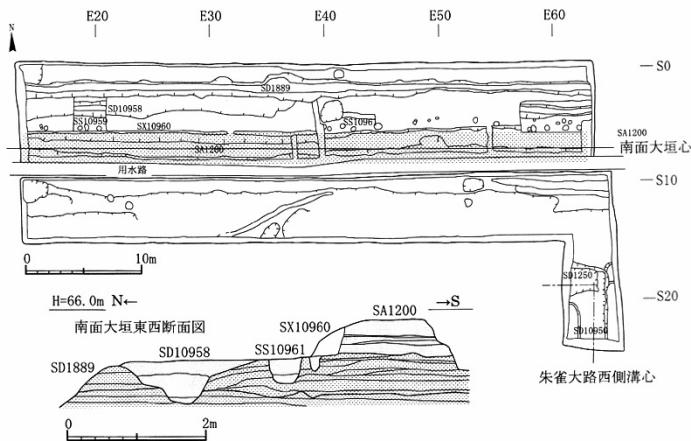


図 7 平城宮朱雀門西方南面大垣遺構図  
(平城宮概報 1983 を再トレース)

とが分かっています。右側は平城宮の発掘調査報告書から引用しました(図7)。今、朱雀門ができるがつています。その真下のこの部分が土壙のあつたことを示す部分、この直線的なアミがかかっているところが朱雀門に、とりつく壙の痕跡ということになります。つまり、私が強調したいのは宮殿というのは「宮垣」、つまり垣があるのだということなのです。飛鳥時代は壙、木の壙であると。それが奈良時代、平城宮にいたつて築地という構造のものになつたということがわかります。

史料3には和銅四年、平城京に遷都したその翌年の記事を載せてあります。

宮垣が、つまり、壁がどういう意味を持ったのかということがわかります。

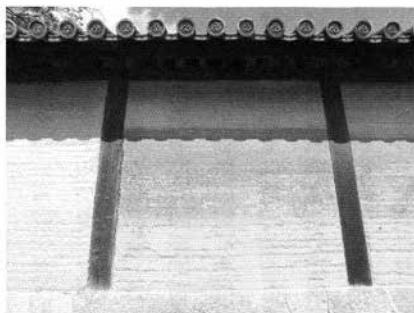


図 6 法隆寺西院南面大垣  
(國下撮影)

(史料3)

丙子、勅、頃聞、諸国役民。労<sub>二</sub>於造都<sub>一</sub>、奔亡猶多。雖レ禁不レ止。今宮垣未<sub>レ</sub>成、攻守不<sub>レ</sub>備。宜下權立<sub>二</sub>軍營<sub>一</sub>禁中<sub>一</sub>守兵庫上。(後略)

(『続紀』和銅四年(七一二)九月丙子条)

(史料4)

是月、初置<sub>二</sub>關於龍田山・大坂山<sub>一</sub>。仍難波築<sub>二</sub>羅城<sub>一</sub>。

(『書紀』天武八年(六七九)一一月条)

(史料5)

壬辰、廢<sub>二</sub>河内國高安烽<sub>一</sub>、始置<sub>二</sub>高見烽及大倭國春日烽<sub>一</sub>、以通<sub>二</sub>平城<sub>一</sub>也。

(『続紀』和銅五年(七一二)正月二三日条)

(史料6)

己卯、新羅使入京。遣<sub>二</sub>從六位下布施朝臣人。正七位上大野朝臣東人<sub>一</sub>。率<sub>二</sub>騎兵一百七十<sub>一</sub>。迎<sub>二</sub>於三椅<sub>一</sub>。

(『続紀』和銅七年(七一四)十二月二六日条)

壁が工事中なので「攻守を備えず」と書いてある。つまり、どこから軍事的な攻撃を受けたら、それを守ることができないということなのです。ですので、武兵をたてると書いてありますから、それなりの防御施設だということはこういった史料からわかります。

実は平城宮の大垣、つまり宮殿の築地は発掘で、土壙の一番下の幅、基底幅というのです。そこが二・七メートルあります。非常に大きい。高さは推定五・六メートル、実は藤原宮

の壁の高さと同じ高さになるのですね。ですので、これはやはり何か伝統的に宮の垣っていうのには意味があるのだろうというふうに思います。

## 難波の羅城

話は「羅城」に移ります。羅城といえば羅城門。しかし、私たちが、都を研究する者にとって、都の周りにそういういた羅城的なものがあるのかどうかというのは、ずいぶんと関心事でありました。というのもこの史料4と5、防御的な記載が『日本書紀』あるいは『続日本紀』に書かれているからなのです。史料4には難波に羅城を築くというのが、天武八年の一月の条『日本書紀』に出てまいります。どうも難波宮を取り囲む羅城があつたということになるわけですが、いろんな議論が進んでいます。まだ研究途上、調査の方も少し途上だらうと思いますが、一つの有力な候補が宮の北西辺りで見つかりつつある。見つかっているのが一本柱壙なのですね。ですので、飛鳥の宮殿、あるいは藤原京ともよく似ております。もう一つ史料5です。高安、大阪ですね。河内の国、高安とか奈良県にかけて、烽、つまり、「のろし」を上げる場所があつたことがございます。こういった文献記録しかないので実際にあつたかどうかというのは、これから検証する必要があります。しかし、都を守る施設っていうのは、ある可能性があるのだというふうに思つていただけたらと思います。

## 平城京と長岡・平安京の羅城

さて、時代は奈良時代から奈良時代の終わり平安時代にいきまして、羅城はどうなつたかなんですが、平城京の場合には平城京の南側に発掘調査をしまして羅城門の一部が発掘されました。さらに、その南側も発掘調査をしたら平城京を覆っているのは、南北が九条じやなくつて十条だつたんじやないかというような成果も明らかになりました。当時は下三橋遺跡というふうに呼んでいて、それが今では「平城京南方遺跡」と名称が変更しました。しかし、この三橋という地名は現地にもございまして、その三橋っていうのが史料6に出てきます。新羅の使いが平城京に入つてくるときに、布施朝臣人あるいは大野朝臣東人が、一七〇人の騎兵で迎えにいったところが三橋であつたということなのですね。その三橋こそ羅城門を出た南側のところだらうと推定されている。佐保川という川が今ありますね。そこに三つの橋が架けられていたという説が、それが地名の由来であろうと。つまり、この記事は宮殿の一番南端の、京の南端の門を出たところで外国の使節を迎える場になつていていうことを一つ知ることができる事例なのです。

ちょっと昔、大和郡山市さんが発掘調査されているときに私がスナップ写真撮らせていただいたので、今日出させていただきました（写真1）。二〇〇五年の九月一六日撮影です。これが羅城であります。二本の柱が並走して走つております。こういったものから、いつたいどういう堀が復元できるのかつていうことについて、議論が別れているわけです。図7は、明治大学の大学院の井上先生の復

元を載せておきます。下が平城京、つまり右の絵から復元していると、上が平安京、これからお話する平安京。羅城っていうのが、こういったまるで土壙のような壁であると、問題は中に土が入っているのか入っていないのか、これはよく分かっていないのです。とにかく、こういったものを想定しています。井上先生によると基準尺が違うだけで、基本的に設計は同じだというふうにお話されています。つまり、羅城というのは遺構としては平城京から確認できて、それ以後、設計そのものは平安京に引き継がれていくということになるわけです。と思つてしましたら平安京で羅城が見つかつたと、この会場の中でも平安

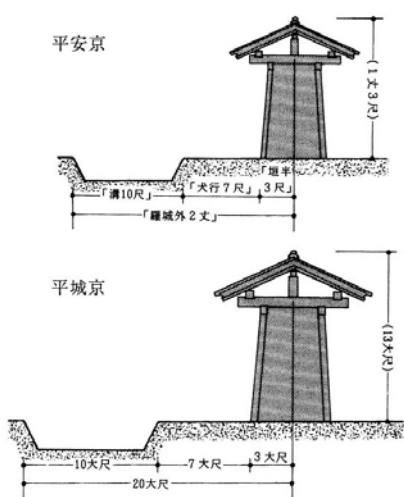


図7 平安京と平城京の羅城  
(井上和人『日本古代都城の研究』2008)



写真1 平城京の羅城跡（大和郡山市調査、國下撮影）

安京の羅城の発掘調査の説明会に行かれた方が、たぶんおられると思います。およそ千人ぐらい、全國からいらっしゃっています。平安京九条路、羅城の調査成果ということで説明会の資料からこれを引用させていただいていますが、ここに羅城の土の壁の一番底の部分が見つかったわけです。さらに、その北側は本当の都の南端の通りである九条大路です。この成果は、平安京にも羅城があるということは文献資料には書かれていたけれども、それをはつきりと遺跡として見つけることができたということで、非常に重要な成果でした。しかも、平安京の南の端、右京の九条一坊、九条三坊の四町ですか、その当たりまで広がっていることがわかつてきたという非常に重要な成果があつたのですね。

### 三 都からみた城柵と山城

#### 政局による城柵と山城の変化

さて、本題というかそろそろ本当に話をすべきところにいくのですが、「都からみた城柵と山城」というところです。実は結論からいうと都は、今日のテーマである東北の城柵と西日本の山城のちょうど中間位置にあるということになりますから、実は当時の律令国家にとつてみれば、いかにその当時の政局あるいは外交関係というものが変化していったのかということを俯瞰できるいい場所にある。そのあたりを見ていただきたいと思うのですが、古代国家の主たる都を中心に七世紀から九世紀の史

料を通史的に総比較するということで、表1をご覧ください。

まず私の主題は都ですが、どこが中心地にまず確定したかと「飛鳥」でした。この表では、推古朝あたりからはじめてございますが、推古朝あたりに飛鳥の中心地、飛鳥盆地、小盆地の中におはりだのみや小墾田宮おはりだのみやというものを造つていくわけです。以降、飛鳥が宮殿の中心地として使わわれていますから、推古朝では少なくとも都というものは固定したんだということですね。ちょうどその頃、東北、西日本がどうなつてているかあまり資料がない。ですので、これはもう発掘調査するしかございません。このあたりの時代のことは、今日ありましたがこの遺跡の表の右側のあたりに書いてある東北でしたら郡山遺跡とか、その前身となる遺跡はないのかっていう、そんなところを見ていかないといけないと思います。そして、東北に一つの経営拠点を創つていくのが孝徳朝であります。孝徳朝の東北經營において渟足柵ぬたりのさきというものを造つていくことになります。そして、柵戸さきど、まあ移民政策を進めていくという意味で、一つの画期が孝徳朝にあるというふうに思います。

そのあと以降も、宮殿は大きく変わることなく飛鳥を拠点に進めています。ここで政治が行われたわけですが、齊明天皇の時代、戯れの天皇ともいわれた齊明天皇の時代には、阿倍比羅夫の東北遠征が始まります。そろそろ古代国家は、東北に対する関心を持ち始める時代なわけです。表1の2ページの部分です。そして、鞠智城の造営の契機になつた白村江の戦いというものが左上にあります。ちょうどそのときに天皇は天智天皇になります。都は大津宮に都がございました。滋賀県の大津

市に都がございました。その中で天智朝の間に西日本の各地に山城が造営されていくということですから、まさに天智朝における大きな動きとしてこれは捉えておかないといけない。一方、東北の方はちょっとあんまり史料がないということなんですね。まあそんなふうに同じ時代なんだけど、東北と西日本というものは、同じ国としての動きがあるはずなのに、同じような史料が残っているかというとそうでもない。ということがここに読み取れますね。

さて、本格的な都ができたのは天武、持統朝の藤原京なんですが、藤原京ができるが持統八年のことになりました。ちょうどその頃、東北では先ほどお話をあった郡山官衙遺跡が、これは仙台市にあるお役所のような施設ですが、最初に木柵堀が作られ始めたという話がありました。これは天武、持統朝における政策と関係付けて、地方政策と関係付けて見ていく必要がやっぱりあるのだろうと思います。そして、この間で左側には、つまり、西南日本の方に冒頭にお話をあつた大宰府に命じて大野城、基肄城、鞠智城の三城を修復させると、いうことがあつたわけです。地方の役所であるところの大宰府に命じて修理させているということですが、どこまで国が関与したのかって問題もちょっと気になるところですね。その中、鞠智城のⅡ期に位置づけられるわけですが、まさに鞠智城の内部が整備されていく時代であつたということになります。表1の2ページの終わりから3ページ目の部分です。時代はもう平城京に移っております。養老四年、七二〇年、三月に大伴旅人を征隼人持節大将軍に任命、隼人というのは九州にいる地元の方々なんですね。それに対する手当もしば

めている。九州に目を向けている。一方、東北では謀叛が、始まる。なかなかうまくいかないわけですね東北経営が。そんな中で東北経営として、これは熊谷先生がおっしゃっている神龜元年体制というふうに呼ばれているんです。七二四年四月、藤原宇合ふじわらのうまちを征夷時節大将軍に任命しているんです。東北においては「多賀城」を置くという大きな事件があつたわけですね。それまでの政庁を引き継ぐ形で、たぶん多賀城に本格的な拠点が作られていくという。七二〇年の「蝦夷の反乱」以降、東北においてはいわゆる「柵」と呼ばれる施設が、悉く陸奥国に建設されていくわけです。東北に対するのてこ入れが進んでいく様子が見えてきます。

平城京に遷都するのが七一〇年、平城京は七八年間なんですね、非常に長い都です。聖武天皇の時代に都をしばらく「恭仁京くにきょう」に移したり、「紫香楽宮しがらきのみや」に移したりと、奉公五年と呼ばれるような時代を経て、また七四五五年に平城京に戻つてくるわけですが、奈良時代の後半になりますと、藤原仲麻呂が当時の実権者として登場して東北の経営に乗り出す。そのときに桃生城もものう、あるいは雄勝柵おからというものが記録上出てくるし、伊治城いじょうというのも出てくるということになるわけです。こんなふうに見ていきまして最後、表1・③・④を見て下さい。私の専門の領域なのですが桓武朝というときに、一つ大きな転換点があつたというふうに考えられています。桓武朝は造営と東北経営の時代であると、経営の時代、征夷の時代であるというような表現があるよう、東北に対しての様々な軍備を増幅して送つていく、作業をしくわけですが、しかし、なかなか都が長岡の地ではうまくいかず「平安京」に都

を移した。その年に有名な坂上田村麻呂が凱旋してくる、というような結果を生むわけです。今日話にあつた近畿大の鈴木さんと、彼が学生の頃、東北と一緒に回った記憶があるんですが、今、そのよう<sup>う</sup>に彼が言つているのは、この坂上田村麻呂の凱旋は平安京の遷都を祝うためにやつたんだといふ、そんなこともおつしやつてある。たぶんあたつてあると思いますが、そういうふうに合わせて都に對しての凱旋報告をしていくことまでやるわけです。そこには、東北あるいは西南に對しての、地方に對しての政治つていうものに對して、いかに当時の律令国家の中央の方々が目配りをしていたのかということをよく示す出来事だらうと思ひます。

### 儀礼空間の影響

儀式空間の影響というものを、レジュメにまとめていきます。結局、宮というものがいつたい地方の城柵や山城と、どのように関係するのかといふところ。つまり、これ政治といふことが一つそなうのでしよう。律令国家で大切なのは、「儀式」をやることなのです。それで、私、東北に行つてまいりました。皆さんも多賀城、素晴らしいです。今、工事されていますが、ぜひとも行かれてみてください。右側は、胆沢城<sup>いさわ</sup>。左側は多賀城の政府の南大路ですね。ちゃんと坂道になつて凛々しく政庁域が一番高いところにあるのですね。そんなふうに場所を選んで造つてあるといふことなのです。胆沢城の壁、まさに築地です。築地の壁にしています。門も非常に立派でした。こういったものもや

はり宮殿の歩みとともに、東北あるいは九州にある、中四国にある、そのような施設は影響を受けているのだということを眼前で確信を持つて帰つてくることができたわけです。

## おわりに

今日は都から古代山城と城柵を見るということで、律令国家という国家がどのような政策を取つていたのかということを見てきたわけですが、基本的にはやはり体制維持で版図拡大していくということが一つ重要である。で、外交関係というのも当然重要なんですが、西日本に分布する古代の山城については飛鳥時代以降、大陸との外交関係についての意識というものがはつきり出てている。さらには、そこの中で軍事的緊張が起きれば、またたく間に城を造り上げるぐらいのエネルギーはあるということなんですね。それは、「水城」であり、「山城」であり大宰府であり、そして鞠智城であるということだろうと。一方、東北の城柵については国家というものが地域をどのように支配していくのかという原理を読み取ることができる。蝦夷への、東北への



写真2 多賀城跡政府南大路（南から、國下撮影）

版図拡大っていうのは、一定の防御制を備えている。一定の防御制ということで完全防備じゃないんです。一定の防御制を備えて、政治支配の拠点となる城柵を造るっていうことが目的であると。城柵の政府、つまり、中心的な施設っていうのは都の宮殿と系譜的につながっているっていう意味で行政庁と外観重視の儀式空間を作っていくという意味では、国家権力というものを、ミニチュア版でそこに作つて地方の支配をするための道具にするっていうふうに説明していいんだろうっていうふうに思つています。

以上で私のお話を終えさせていただきます。ありがとうございました。